

神戸女学院史料室記事

史料室が仮設校舎内に仕事を構えてから二度目の春を迎える。窓の外を工事用の車が忙しく行き交うのを見ながらの一年であった。

一九九六年度の史料室の学内での活動は例年通りであった。

昨年度から「学報」にいただいている一頁分のスペースに記事の掲載を続けている。今年度は、「神戸女学院を創った Ladies of the 19th Century」(「一九九六年七月八日発行、第一一六号」)、「いま、大学史が、おもしろい」(「十二月十八日発行、第一一七号」)、「Mrs. Moses Smith 記念講堂」をめぐって(「一九九七年三月十八日発行、第一一八号」)の三本で、学院史関係の記事のほかに史料室の活動報告も載せている。そして、毎年年度末に発行していた『学院史料』は諸般の事情から年度始めに発行することになり、今年の一五号から五月に発行する。

学外の活動は年を追うごとに活発になってきている。本誌別稿に報告した如く、東西の大学史担当者の会は一九九六年四月一日、遂に全国組織として発足した。全国大学史資料協議会、五月現在で加盟校は六〇校、個人会員は二〇名を数える。これ

まで着実にこなってきた活動の更なる発展が期待される。

また、一九九六年夏には音楽図書館協議会主催の国際セミナーが京都で開かれ、神戸女学院からは茂 洋名誉教授、若山晴子助手が発表者として参加。キリスト教が近代日本の文化に及ぼした影響、キリスト教と女子高等教育や近代日本の教育とのかかわりなどを広い視点から捉え直す機会に恵まれた。近年、当史料室に問い合わせられておられる方々の中に、こちらの思いもよらない分野の研究者方がふえていることを思う時、こうした多方面からの歴史の見直しを一層痛感させられる。

学院の復興事業は、一九九六年二月二十三日の新校舎二棟と新寄宿舎の起工式によって本格的に動き出した。新館にはそれぞれ宣教師の先生方を記念して名前がつけられる。大学研究棟はジュリア・ダッドレー記念館、中高部校舎はアンジー・クルー記念館、寄宿舎はメアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮(西館、北館)。当史料室は大学研究棟に場を与えられることになっている。一九九七年三月二十五日には寄宿舎の定礎式並びに開寮式が行なわれた。復興への歩みは着実に進んでいる。本誌次号は新しい史料室からお届けできることであろう。

(寺西裕加恵)